

FD News letter

 No.3
 2015年

CONTENTS

1. 公開授業研究 「社会文化フィールドワーク」 2. 開催案内:公開授業

1. 公開授業研究「社会文化フィールドワーク」

2015年7月23日(木)2限横浜キャンパスにおいて、社会メディア学科「社会文化フィールドワーク」(岡部大介先生・関博紀先生ご担当)の授業が公開された。この科目は、2年次専門科目です。前半を岡部先生が、後半を新任の関先生が担当され、まとめの数は2名で指導されている。授業は通常、教員の話と学生のグループワークで構成され、教員の話の内容は、学科として身に付けて欲しいと考えている「フィールドワーク」を含む質的調査法についての説明や成果のまとめ方等とのこと。当日の授業は第14回目、最終回で、学生の各グループの成果発表および教員からのコメントが主な内容だった。この科目は公開された授業だけでなく、これまでの授業でもアクティブ・ラーニングをさせている。

履修学生は60名ほどで、各グループ4~5名で10班である。多くは男女別のグループ編成に見えた。各グループは学生たちが選択したテーマの下、それぞれが調べた内容をまとめたものを、パワーポイントを使っての発表である。そのテーマを一部挙げると、「キラキラ空間 蔦谷家電」「古着屋が呼ぶ人、呼ばない人」「周囲との関係性による身だしなみの変化」「オタクが秋葉原に行く「ワケ」」等々。発表グループに対して、それを聞く学生たちには「リフレクション・シート」が配布され、これに、発表を聞いての感想ではなく、自分が学んだことを書かせている。

発表が8分間なので、調べた内容(テーマを選択

き出せること)を手際よくまとめなければならない。プレゼンテーション技術の習得も求められている。

ところで、この授業の学科カリキュラムでの位置づけは、次のようになっている。1年次前期学科基礎科目(必修)として「情報発信入門」があり、ここでは①多様なメディアを通じての情報収集を行う ②フィールドワークを経験する ③得た情報を加工し、受け手に合わせて発信する ④コミュニケーション能力のアップを目標としている。さらに1年次後期では、やはり学科基礎科目(必修)「社会調査」の履修を求め、その目標を①社会調査の現代社会における意義を具体的な事例から学ぶ ②社会調査の量的・質的な方法のそれぞれの掘って立つ観念の違いや、各方法の持つ長所や問題点を理解する





③既存の社会調査研究を的確に評価できるリサーチリテラシーを身につけるとしている。この2科目の上に、2年前期学科基盤科目として「社会文化フィールドワーク」、同「プロジェクト学習」を位置づけている。すなわち、1年次に情報収集手段、発信方法、コミュニケーション能力を培い、社会調査という考え方・方法を身につけさせた上で、2年次のこの科目で学生自身が抱く社会文化に対する興味を具体的に選択させ、フィールドワークの手法を演習を通して獲得させる、というもののようである。

これらを考えると、学生たちがそれまでの学習で教員（学科）が期待する内容をどれだけ身につけてきたかを確かめると同時に、学生たちが描く（とらえた）「社会文化」を探ることができることができる。つまり、これまでの学習の評価でもあり、彼らが示す学習内容を教えた教育評価にもつながる授業ともいえる。

こう考えたとき、教職教育を担う身として、カリキュラム構成（工・知における実際は、どの学科の学生に対しても履修可能性を保障するために、本来構成すべきカリキュラム構成ができていないことを思うわけだが）の大事さ、そして個々の科目・授業の大事さを改めて具体的に示され、大いに刺激を受けた。

また、授業において学生たちが発表したテーマと内容を見ると、彼らの生活・関心が見てとれる。だが、それらが果たして学習の結果、日常の彼らの生

るかに興味を覚えた。これも教職の授業と重ね合わせて恐縮だが、ある意味模擬授業をさせたときに、それまでの教職教育がどれだけ活かしているか、学生たちの受けてきた初等・中等教育をどれだけとらえ直させ、新たな見方（都市大の教職課程で学んでよかつたと思わせる）を獲得させられているかを振り返らせてくれた。

やはり授業を見せて頂けることは、大きな刺激を受けると同時に、自身の授業を振り返らせられ、これからの授業づくりを楽しみにさせてくれる。ありがとうございました。

（共通教育部／人社系・教職教育部門 岩崎敬道）

2. 開催案内：公開授業

下記の要領で、FD 専門委員会による授業公開を行ないます。

日 時：1回目：2015年11月23日（月）、3限

2回目：2015年11月30日（月）、3限

場 所：等々力中高体育館 第2体育室

（地下体育室）

科目名：幼児の身体表現指導法

（人間科学部児童学科3年次選択科目）

担 当：高橋うらら

内 容：「他者との関わり、空間の広がり」についての表現遊び体験と模擬保育（後期第8回目、第9回目）

1回目：表現遊び体験

2回目：模擬保育